

## はしがき——理論と実証の結びつき

かつて私は、須藤廣との共著で『観光社会学』（明石書店、2005年）という書籍を刊行したことがある。そこで須藤は、ある章で、大分県由布院という観光地を考察していた。由布院は「緑と静けさ」を大切にしながら地域を育み、観光まちづくりの成功事例となった場所である。

しかしながら須藤が、観光客や観光業者に対して行ったインタビュー調査からは、そうとは言い切れない姿が浮き上がっていた。

観光客からは、「由布岳が見えて、自然が美しいと思った。観光地化を過度にするべきではない」「どこも同じ。ケーキ、コーヒー…うるさい。作るべきではない」といった声が聞かれ、観光に過度に傾斜してしまうことに不満があがっていたのである。

地元出身の観光業者も、「県外の全国展開しているような商業的な土産屋企業が入ってきて、ここ4、5年で町が変わってしまった」「観光は水ものなので、観光にあまりたよらないように考えている。生き方として、型にはまるのは好きではない」という声が聞かれ、観光への傾斜に対して違和感が抱かれていた。

それに対し、地域の外部から最近やって来た比較的若い観光業者は、「観光協会との人間関係やコミュニケーションはない。地元の人との人間関係はほとんどない。観光客とのコミュニケーションが楽しい」「外から来た大きな店に土地を貸して相当の収入を得ながら、『観光地化』を嘆く地元民は矛盾している」と述べており、観光を批判している人たちに冷めた視線を向けていた。

こうして由布院は、「観光まちづくり」の活動に成功したことによって、まちの人々に大きな温度差が生まれ始め、当の「観光まちづくり」そのものが変容し始めているということが、実証的に浮き彫りにされていたのである。

ツーリズム・リサーチメソッドは、こうした具体的・実証的データをもって考察を展開するうえで大きな力を発揮する。それは、観光現象を捉える時になくしてはならないものだといえよう。だが、そうした実証的データを、私たちは

理論と結びつけて考えていかなくてはならない。

実証から浮き彫りになった由布院の姿を、たとえば「再帰性」という理論で捉えていくと、どうだろうか。「再帰性」とは、社会学の理論において、光が鏡にあたって自分自身に再び帰ってくるように、ある存在・行動・言葉・行為・意識がブーメランのように、それ自身のもとへ再びはね返ってきて、時にそれ自体の根拠を揺るがせてしまうことを言う。

由布院のインタビュー調査をきっかけに、こうした「再帰性」が由布院という場所でみてとれないだろうか。

由布院が目指した「緑と静けさ」の観光まちづくりに成功すると、多くの人々が観光にやってくるようになり、集客を目指して多くのショップが開店するようになる。そして、まち全体に温度差も生み出され、統一感がなくなり、「観光まちづくり」に亀裂が生じ始める。そうした結果として、「緑と静けさ」が失われていく。良かれと思って懸命に「観光まちづくり」に取り組み、成功を取れば取るほど、「観光まちづくり」の理念から離れてしまい、結果、当初の思いと異なるものへと変質していく。それは、まさに「再帰性」のもことで引き起こされた「意図せざる結果」であるといえよう。

ある特定の場所で行われた具体的・実証的なデータを、抽象的な理論へと繋げていくことができるならば、「再帰性」とも呼ぶべきものが観光では由布院だけではなく、様々な観光現象の中で見られることを捉えることができる。そして、そうした観光現象においても具体的・実証的なリサーチ・データを蓄積し、理論をより豊かにしていけるようになる。

こんな風に、リサーチにおける「実証的な思考」と、抽象的な「理論的な思考」を結びつけ結晶化させていくこと——それこそが観光研究にかぎらず、人文・社会科学が目指すべき一つの形なのである。否。学問分野だけではない。具体と抽象の往還（行ったり来たりすること）を何度も繰り返しながら、考え続けていくことは、私たちがこの世界を生きるうえで大切なことではないか。

ぜひとも本書を通じて、ツーリズム・リサーチメソッドの一端に触れていただき、それを通じて、「実証的な思考」と「理論的な思考」を結びつけ結晶化させていく力を育む一助としていただければ幸いである。